Wilhelm Backhaus

SLC 6052

BRAHMS

PIANO CONCERTO No.2 IN B FLAT MAJOR, Op.83

KARL BÖHM/VIENNA PHILHARMONIC ORCHESTRA

ブラームス
BRAHMS

ピアノ協奏曲第2番変ロ長調，作品83
PIANO CONCERTO No. 2 IN B FLAT MAJOR, Op. 83
(17:10/8:50/12:15/9:50)

ウィルヘルム・バックハウス（ピアノ）
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
指揮：カール・ベーム

WILHELM BACKHAUS (piano)
with THE VIENNA PHILHARMONIC ORCHESTRA
conducted by KARL BÖHM

バックハウス／ベーム／ウィーン・フィル

門馬直美

バックハウスは、1884年3月26日にライプツィヒで生まれた。7才のときから15才のときまで、ライプツィヒでアロイス・レッケンドルフにピアノを学び、それからすぐフランクフルトで大ピアニストのダルベールに師事した。当時のダルベールは、演奏活動に忙がしくて、弟子をとっていなかったにもかかわらず、バックハウスの技巧にほれこんだとか、あるいはみどころがあると感じたとかで、バックハウスを弟子にしたのだろう。

演奏家として名をあげたのは、1900年にロンドンで成功してからのことで、その翌年には、ニキシュ指揮のライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団と協演したのだった。それからは、演奏家としての多忙な生活を続け、日本にも1954年にきたことがある。教職につくのもバックハウスには向かないらしくて、そのような仕事をバックハウスは、ごく短期しかしていない。実際に、バックハウスの直弟子だという高名なピアニストは、ほとんどいないのではないだろうか。

ベームは、このバックハウスよりもちょうど10才年下で、1894年8月28日にオーストリアのグラーツに生まれている。グラーツの大学で法律を学び、ドクターの称号を得たいっ方で、グラーツ音楽院でも勉強し、のちには、さらにウィーンの音楽院にも籍をおいた。そのウィーン時代に、カール・ムックから大きな影響を受けたという。1916年にグラーツ歌劇場の練習指揮者となって、指揮者の道を歩みはじめ、19年にはそこの第2楽長に昇格し、20年には第1楽長に就任した。その後、ミュンヘン、ダルムシュタット、ハンブルク、ドレスデンなどの歌劇場の指揮者を歴任し、43年からはウィーン国立劇場の指揮者に就任した。しかし、45年に爆撃の直撃弾で劇場は閉鎖し、ベームも、それに続く戦後から客演指揮者として各国を訪問することが多くなり、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場にも何回も姿をみせた。1953年から56年までウィーン国立歌劇場（場所はアン・デア・ウィーン劇場）総監督となり、55年11月の新装になった国立歌劇場の再開には、〈フィデリオ〉を指揮した。やがて、当時ウィーンで勢力をふるっていたカラヤンにその地位を譲り、ベームは、ウィーンやベルリンその他のフィルハーモニーや歌劇場で指揮活動を続けるようになったのである。もちろん、ザルツブルク音楽祭やバイロイト音楽祭にも数多く出演している。1963年秋には、ベルリン・ドイツ・オペラの指揮者として来日し、翌64年には、70才の誕生日にオーストリア政府からゲネラル・ムジークディレクトール（音楽総監督）の称号を贈られた。

このベームの指揮のもとにこのレコードで演奏している**ウィーン・フィルハーモニー**は、1842年発足というわけで、ヨーロッパでも長い伝統と由緒ある風格を誇るオーケストラに数えられている。代々史上にのこるような名指揮者を、常任に迎えてきたことも大きな特徴である。ブラームスも、何回となくこの管弦楽団を指揮したことがある。

いうまでもなくウィーン・フィルは、国立歌劇場管弦楽団となって、オペラも演奏するし、予約演奏会その他の演奏会もおこなわなければならないし、演奏旅行をしなければならないしで、きわめて多忙である。しかし、そうしたなかで、伝統的な音色を大切にし、典雅さを尊重して、つねに他のオーケストラからは求められないひびきと雰囲気をつくりだす。もちろん、このレコードの場合でもそうである。ことにベームは、国立歌劇場の指揮者の時代から、当然、このウィーン・フィルとは密接な関係をもっていたので、ウィーン・フィルの長所をみごとに生かしている。

曲目解説

ブラームス（1833～1897）は、ピアノ協奏曲を2曲のこしている。その第1番の協奏曲は、初期の作品であって、いろいろの変転をへながら1858年に完成されたものである。第2番のものは、それよりも20年以上ものちの1881年に書きあげられたものである。従って、第1番と第2番の協奏曲とでは、多くの点で様式上の違いがあらわれてきている。この第2協奏曲までに、ブラームスは、第1と第2の交響曲のほかに、ヴァイオリン協奏曲、〈大学祝典序曲〉〈悲劇的序曲〉なども発表していて、文字通りに円熟した境地にはいり、管弦楽の扱いにも熟達ぶりをみせていた。それだけにブラームスは、この第2ピアノ協奏曲に相当の野心をもってのぞんだともいえるのである。

1878年春に、ブラームスは、慎重な準備を重ねて、はじめて憧れの第1回イタリア旅行をおこなった。そして、帰ってから、夏は気に入りの避暑地のペルチャッハで創作に従事した。このときの主要な作品は、はじめて手がけられたヴァイオリン協奏曲であった。イタリア旅行とこの協奏曲とは、必ずしも全然無関係とは考えられない。そして、この協奏曲の副産物として、翌年にヴァイオリン・ソナタ第1番が書かれている。ブラームスとしては、このイタリア旅行の途中で、ピアノ協奏曲の作曲を思いたったといわれ、夏に余裕があれば、ピアノ協奏曲にまで手をのばしたいところだった。

1881年になってすぐに、〈大学祝典序曲〉と関連のあるブレスラウの大学の学位授与式にでかけ、それからドイツ国内やオランダ、ハンガリーなどへ演奏旅行をし、3月末に、やっと第2回目のイ

タリア旅行を実現させることができた。そして、5月はじめにウィーンにもどり、5月22日から10月初旬まで、ウィーンからほど近い緑の美しいプレスバウムに滞在した。このプレスバウムで書きあげた大きな曲が〈哀悼歌〉と、この第2ピアノ協奏曲というわけである。〈哀悼歌〉は、ヴェネツィアで前年1月に世を去った親友の画家フォイエルバッハを追悼する意味のもので、イタリア旅行の影響をみせる。それと同じように、第2ピアノ協奏曲も、このイタリア旅行と無縁のものではない。たしかに、今回再度のイタリア訪問で、以前のイタリア旅行の印象をよみがえらせ、一気に筆を進めていったと考えられるのである。ただし、第1回目のイタリア旅行のあとに手がけたものが、ヴァイオリンのような旋律楽器を生かしたものであったのに対し、この第2回目では、合唱やピアノといった和声的、対位法的なものを生かしている点に、興味ある相違が認められる。

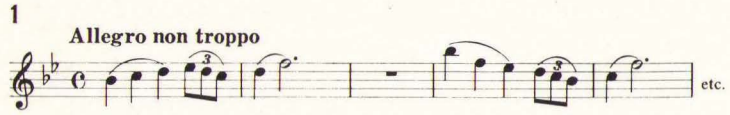
とにかく、この協奏曲は、ブラームス独特の落ちついた重厚さをもっているが、またイタリア旅行と関係のある明るい朗らかさもそなえている。ブラームスは、この曲を、親しい人に〈ひとつの小さなピアノ協奏曲〉と告げたことがあったが、これは、ブラームス好みの述説ともいうべきものであって、事実は、その曲は当時の協奏曲としては珍らしく4楽章をとった規模の大きなものとなっている。そして、流行の巨匠交響曲のように、ピアノを華やかに多彩に活躍させて、けんらんとした効果をだすというものではなくて、またピアノが管弦楽に対して威張り、管弦楽の前景に立つというものでもなくて、ピアノと管弦楽とが対等に扱われている。あるいはむしろピアノを完全に管弦楽に融合させているといったことである。従って、とくにピアノだけが派手に浮きあがるということもなく、ピアノは、ブラームスなりに考慮されて動いているということになる。こうしたわけで、この曲は、ピアノ独奏部をもつ交響曲といわれることもある。それにしても、このピアノは、技巧的に平易なものではない。それどころか、技巧上からみても、この曲は古今のピアノ協奏曲のなかでの難曲にぞくするものであり、なかでも堂々とした力感のために、完全に奏するには女性ピアニストには無理だとさえもいわれている。そうした点からも、この曲は大家リストから気にいられこの曲の楽譜をブラームスに丁重に所望したという理由が知られるのである。

公開の初演は、1881年11月9日にブダペストでおこなわれた。そのときのピアノはブラームス、指揮はアクレザンター・エルケルだった。しかし、ブラームスは、曲を書きあげてからこの初演までの間に、マイニンゲンに滞在し、そこの管弦楽団でこの曲を試演し、それに従って補筆などもしたのだった。前年から、この管弦楽団の指揮者にハンス・フォン・ビューローが就任していて、ブラームスに、新しい作品を検討する必要があるときには、いつでもこの管弦楽団を自由に使うよう申しでていたからである。この管弦楽団の所有者のゲオルグ2世公爵も、賓客としてブラームスを迎え、ブラームスのために心のこもった接待をしたのだった。

●――**第1楽章**　アレグロ・ノン・トロッポ

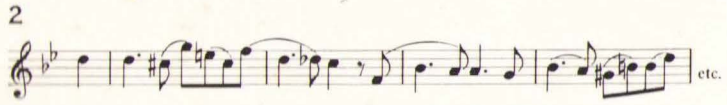
変ロ長調で協奏曲風ソナタ形式をとる。いかにもブラームスらしく力強く重厚に書かれている。まず、ホルンが第1主題を奏しはじめる。

1



すでにこのときに、ピアノが美しく絡んでくる。木管がこれを発展させたあと、ピアノがカデンツァでそれを飾りたてる。それから管弦楽だけとなり、第1主題を扱い、短い経過句で少し気分がゆるんでくると、ヴァイオリンが第2主題を歌うように表情豊かに奏しだす。

2



リズムの歯切れのよい小結尾をへて、第1主題がまたあらわれる。そして、ピアノを加えて、いわゆる独奏呈示部が多彩ななかにくりひろげられてゆく。この第1主題ののちに、管弦楽とピアノで応答風に第2主題がでる。力強い小結尾楽句は、以前よりも情熱をおびてきている。ふたたび管弦楽が第1主題を壮大にだすと、展開部がはじまったことになる。すぐそれに続いて第2主題がだされる。こうして、両主題は縺れ合ってゆき、展開されてゆくわけである。ピアノが間もなく加わり、力強く情熱的になって、小結尾の歯切れのいい楽句も展開の材料に加える。ピアノは、このあたりで、きわめて技巧的に動き廻っている。第1主題の動機がはっきりと姿をみせはじめてから間もなく再示部となり、第2主題の再現ののちに、ピアノの短いカデンツァがくる。それから結尾となり、この楽章は、力を盛りあげていって結ばれるのである。

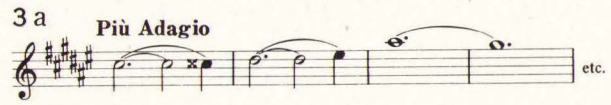
●――**第2楽章**　アレグロ・アパッショナート

ニ短調で3部形式。明記されてはいないが、この楽章はスケルツォに相当し、しかも精力的でもあり、情熱的でもある。ピアノによってはじまる動的な主題と、弦にでる優美な主題とをこの楽章の主要材料とし、互いにはっきりと対比させている。管弦楽でクライマックスを築いてゆくと、スタッカートの新しい主題がでて、中間部がはじまる。この中間部では、ホルンの活躍も目立っている。その後、ピアノに導かれて第3部がはじまり、第1部の材料を扱って、この楽章は終わる。

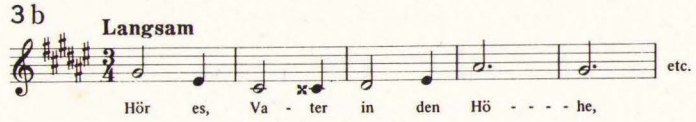
●――**第3楽章**　アンダンテ

変ロ長調で3部形式に従う。ロマン的な情感にあふれ、北ドイツ的な重厚さのなかにイタリア的な明るさを加えた典雅な楽章ということができる。チェロ独奏を重視しているのも、この楽章の特徴ともいえる。チェロ独奏がヴィオラと低弦の美しい対位法を伴って、主題を綿々とくりひろげてゆく。間もなく、ピアノが愛らしい音型ではいってきて、ピアノだけによるこの音型の発展となる。ついで、以上の種の材料を展開風にピアノと管弦楽が扱ってゆく。速度がピウ・アダージョに落ちて、ピアノとクラリネットがなごやかに絡みあい、曲は嬰ヘ長調の中間部にはいる。この中間部はごく短い。このクラリネットの旋律〈楽譜3a〉が1878年作の歌曲〈死の憧れ〉(作品86の6)の後半部の旋律〈楽譜3b〉の引用であるのも面白い。

3a



3b



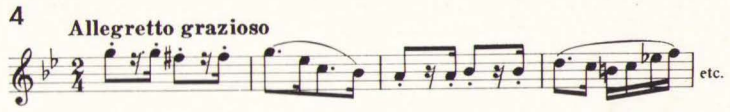
なお、この中間部にはいる前に、オーケストラのパートの楽譜と、ピアノ独奏の楽譜との調子記号が違っているのも、当時として珍らしい(オーケストラはフラット2、ピアノはフラット5)。中間部が終わり、速度がもとにもどると、第1部の冒頭の主題が弦であらわれる。今度は、ピアノを効果的に精巧に加えてゆく。そして、しばらくしてピアノの例の音型がでたのちに、この楽章は、静かに余情をたたえながらピウ・アダージョで終わる。

この楽章の冒頭の独奏チェロの主題は、のちに作品105の2の歌曲〈私の眠りはいよいよ浅く〉に自由な形で引用された。

●――**第4楽章**　アレグレット・グラツィオーソ

変ロ長調でロンド形式をとる。ピアノによる軽妙な舞曲風な主要主題ではじまる。

4



これをピアノからヴァイオリン、それから全管弦楽と順次に確保しながら、次第に厚みをもたせて扱ってゆく。副主題は、3部的な構成をとっている。つまりはじめ木管に示され、ついで弦と管による応答で進む。すると、ピアノが軽やかな中間部旋律をだす。このあとに、また副主題の冒頭が復帰する。その次にくる主要主題の再現は、展開をかねたもので、きわめて入念なものとなっている。それに続いて、副主題の再示となるが、これは前よりも簡潔なものとなっていて、それからピアノだけで速度をあげて短いカデンツァ風の句をだす。このようにして、ここで結尾となり、主要主題を扱いながら頂点を築いて、全曲を堂々と結ぶのである。

LONDON

発売元・キングレコード株式会社
★レコードから無断でテープその他に録音することは法律で禁じられています。

℗ 1973
©

ブラームス

ピアノ協奏曲第2番変ロ長調、作品83

●

ウィルヘルム・バックハウス(ピアノ)
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
指揮／カール・ベーム

定価 ¥2,000.